

## 宇奈岐日女神社

金鱗湖と由布岳、そして由布院の自然に囲まれたこの神社は、「六所様」や「六所宮」と呼ばれ地元の人々にとって重要な寺院のひとつです。由布院盆地の南側、ちょうど倉木山の麓にあります。歴史は古く、約千年前、日向国霧島神社での神のお告げにより、由布岳の山腹にて庵を結び観音像を刻し、祀ったのがはじまりです。宇奈岐日女は美人な神で、力自慢の権現に命じてこの由布院を干拓したという伝説があります。

宇奈岐日女神社は、元来、由布岳の山霊神を祀る神社です。つまり、御神体は由布岳そのものなのです。やがて由布郷内にも稲作が始まり、人々は一カ

ではないでしょうか。

宇奈岐日女神社は、平安初期になって、朝廷から官位をもらい、式内社に列せられました。その後、天台系の山岳仏教と結びつき、六所六観音の霊地として、修験僧の活躍する舞台となりました。天神地蔵・皇祖に関係のある神々が祭神として祀られるようになったのは、それから後の時代のようなようです。

境内は1万坪を超え、杉の古木に囲まれていますが、平成3年の台風19号で大きな杉のほとんどが倒されてしまいました。その中には、樹齢600年を越えると推察されるご神木もあり、今では倒れた御神木の切株を祀っています。過去に何度も伐採の経緯があり戦国時代の末期、大友義統の時代に、大分市に鎮座

所に定住し、部落を形成すると、集団の統率者が出てくるようになります。その初期に現れた偉大な統率者が宇奈岐日女だったのではないかと考えられます。そして、部落住民の祖先崇拜の気持ちと山霊神を祀る精神が混然一体となり、こんこんと湧く水源の注ぐ池に、宇奈岐日女神社が創建されたのでしよう。

「うなぎ」というのは古語の「うなぐ」という動詞から出た言葉で、「首にものをかける」意味を表します。宇奈岐日女は、首に勾玉などで作られた首飾りをしている女神と解釈できます。この山深い由布郷で、そのような美しい宝物を首にかけて社の森に住んでいる女神は、村人から大きな信仰を集めたの

する豊後一の宮「柞原八幡宮」造営用の材木をこの六所宮から伐採したことがあったという古文書が残されています。

